

遠隔授業配信センターでの実践

～遠隔授業の準備と手順・同じ生徒への3年間の継続指導について～

遠隔授業配信センター 数学科

1 はじめに

今年度の数学科は全員20年以上の経験がある教員で構成されており、その中には初めて遠隔授業を担当する者と、配信センター開設時から在籍する者がいる。それぞれのこれまでの取組・実践について、まとめることとした。

2 数学科の実践内容

(1) 授業準備・授業の手順

今年度初めて遠隔授業を実践し、従来の実践と同じ点や、異なる点についてまとめた。

	従来の実践（対面授業）	配信センターでの実践	遠隔授業ならではの特徴
前年度	・シラバスの作成	・1月の時間割作成時に教員別時間割を決定	・受信校のシラバスを使用するため作成なし
年度当初	・教科会で担当授業を割り当て後に教員別時間割が確定	・前年度決定済みの教員別時間割に教員を割り当て、確定	・Googleクラスルーム作成が生徒との連絡用に必須
授業前	・授業用プリントの作成 ・黒板用板書計画の作成	・授業用プリントの作成 ・電子黒板掲示用Googleスライドの作成 ・宿題プリントの作成 ・振り返り用Googleフォームの作成	・授業用プリントの送信 ・正答をホワイトボードに記入（前時に配信スタジオ未使用の場合） ・遠隔授業用パソコンにGoogleアカウントログイン
授業時	・黒板に必要事項を板書 ・内容によってタブレットを活用して授業を展開	・Googleスライドや、デジタル教科書・コンテンツを電子黒板に掲示して、教員・生徒がともにデジタルペンで記入 ・内容によってGoogleスライドやジャムボード等を活用し、思考を可視化	・大型モニターを利用した生徒の様子の見取り ・配信映像の撮影範囲（電子黒板・ホワイトボード）をワンタッチボタンで切替
授業後	・宿題等の指示	・宿題等の指示・送信	・支援教員との情報共有 ・Googleクラスルームで宿題提出状況の管理や返却
放課後	・対面で補習・個別対応	・複数校に同時配信補習	・Google Meetを利用した個別対応
定期試験前	・テスト範囲の連絡	・Googleクラスルームを通じてテスト範囲の連絡	・テストをPDFファイルにし、締切前日までに送信
定期試験時	・テスト実施時の巡回		・巡回できないため、受信校の教員に依頼
定期試験後	・テストの採点→解説 ・校務支援システムに成績入力	・テストの採点→解説 ・校務支援システムに成績入力	・受信校からテストを受信し、採点後返信し、支援教員から返却
その他		・担当校の行事予定を把握し、訪問日を調整	・担当校への訪問（2単位以上の科目2回、1単位の科目1回）

(2) 同じ生徒への3年間の継続指導について

令和3～5年度の3年間、A校の同じ生徒2名を継続して担当した。その指導内容について、1年次から順にまとめる。

ア 1年次の生徒の状況

入学当時、基礎学力診断テストの得点が他の生徒と比べ特に高いため、この2名だけで遠隔授

業を行うという受信校からの要望であった。学力は同程度であり、2名なので個に応じた指導も可能であった。加えて学習意欲があり、ほぼ皆勤で、自分で学習する力も備えており、課題提出を催促する必要もない生徒であった。

イ 教育課程・指導内容

科目(単位数)は「1年次：数学Ⅰ(4)・数学A(2)、2年次：数学Ⅱ(4)・数学B(2)、3年次：数学Ⅲ(6)」と、3年間まとまった単位数を担当できたことと、進度や指導内容、課題や試験について他の生徒とそろえる必要がないことで、独自に学習指導年間計画を立て、効率的に授業を進めることができ、生徒の理解度により進度や指導内容の工夫ができた。

具体的な教材は、1・2年次は教科書と副教材である数研出版チャート式参考書を中心に、3年次はそれらに加えて数研出版プラン100・プラン120、様々な実践問題集(※)、共通テスト過去問：数学ⅠA・ⅡBにも取り組ませた。また、1年次から長期休業中の夏季補習や冬季補習、3年次には学校の放課後補習を遠隔で実施し、授業ではできない演習が実施できた。

- ※・駿台文庫 2024大学入学共通テスト実践問題集 数学ⅠA・数学ⅡB
- ・河合塾 2024共通テスト総合問題集 数学ⅠA・数学ⅡB
- ・Z会 2024年用共通テスト実践模試 数学ⅠA・数学ⅡB
- ・数研出版 2024プレテスト数学ⅠA・数学ⅡB

ウ 生徒の成績・進路

進研模試偏差値が2年7月には70台前半に達し、1年7月から20近く上げた生徒は、学校推薦型選抜Ⅱで国立大学に合格した。もう1名も、遠隔授業で難しい問題を扱う内容が続いても途中で投げ出すこともなく、努力を継続した。クラス担任と保護者の見守りと励ましもあり、県外の大学への進学が決まった。

エ 所感

遠隔授業を受ける生徒が、クラスから少人数で取り出される場合は、何よりも本人の意思や希望が、授業に大きく影響するということである。単に学力が高いというだけでなく、本人の意思をしっかりと確認することが大事であると考えます。

3 おわりに

遠隔授業には学校相互型と配信拠点型の2種類があり、私たちが在籍する配信センターは、遠隔授業の専任教員により構成されている配信拠点型である。

令和3～5年度に文部科学省が本県を含む13道県に委託し研究した『地域社会に根ざした高等学校の学校間連携・協働ネットワーク構築事業(COREハイスクール・ネットワーク構想)』の最終報告書によると、学校相互型では「自校の授業や業務を兼務することに負担感を感じたり、受信校の指導を優先せざるをえないことに対して心理的な負担を感じるケースも多い」ため、「負担軽減の観点からも、遠隔授業専任の教員を配置した配信センターの設置が望ましい。」と記載されている。他県に先行して配信センターが設置された本県への視察は30回を数え、他県から「将来的に配信センターを設置したい」と伺うことも多かった。

そこで、2(1)では、遠隔授業を初めて担当する教員の心理的な負担を軽減すべく、従来の実践をもとにどのように代替・増強してきたかをまとめた。参考になれば幸いである。また、2(2)では、本県の遠隔教育推進事業の目的「学校規模や地域間における教育機会の格差の解消」に最も合致した事例の指導内容を詳細にまとめた。遠隔授業だからこそ、生徒数が学年平均40人未満の小規模高等学校において、2名を対象としたハイレベルな習熟度講座を3年間継続して開設でき、配信拠点型だからこそ自校の生徒のように様々な補習を提供できたものと考えます。

前述の最終報告書には、配信センターは「ノウハウや課題を蓄積・共有しやすい」との記述もある。私たちの気付きを、受信校や県教委とも共有して、今後も遠隔授業の質を高めていきたい。